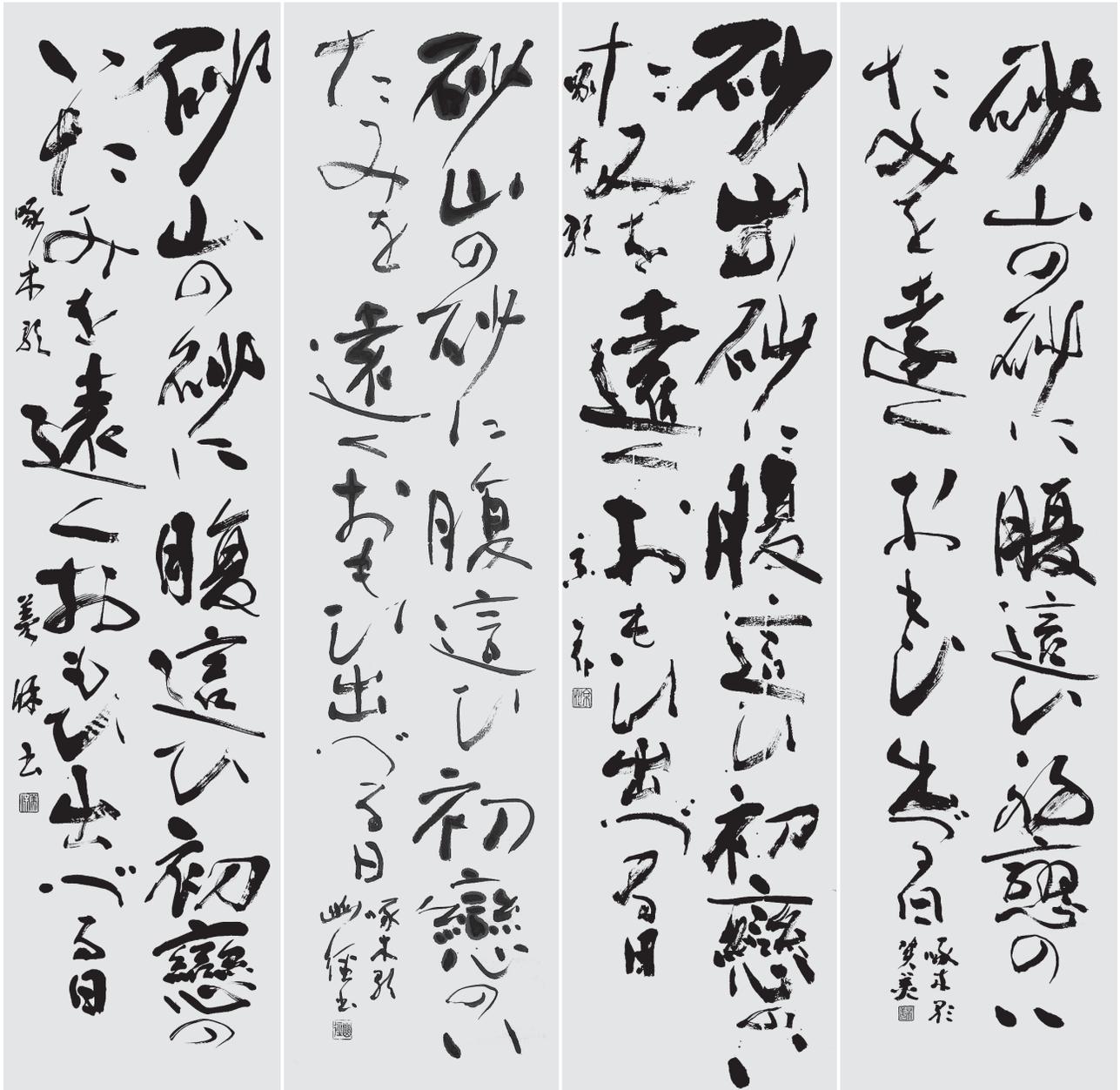


葛西玄涛先生選評



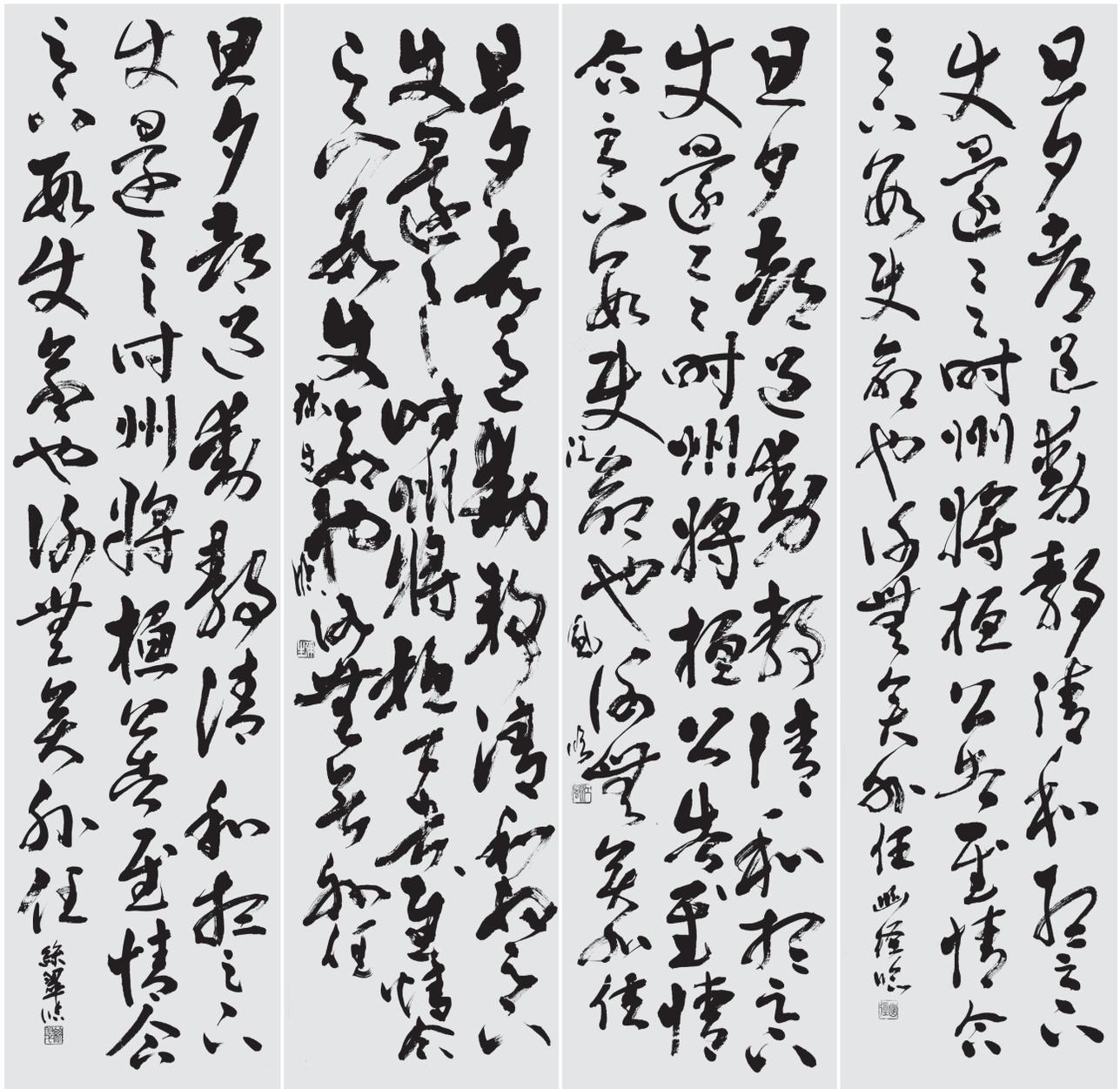
三輪 芙美 推選
 速度の変化が激しい運筆で線質が豊富になり、活発な動きのある明るい作品となった。潤筆の沈む線のときの毛筆の反発を利用した細線が紙面に香辛料をかけた。

朝賀 京花 推選
 軽重の差が大きく、豪快だ。筆圧の強い太い線は、破壊力をたくさん持っているが、力みの無い柔らかな動きの軽やかな渴筆を含んで、作品を壊さずに安定している。

山口 幽径 推選
 淡墨でも強い線が多く、他に負けない主張がある。一行目は、文字の幅の変化で揺れがある。二行目は、文字の中心を変え、行が斜めになり美しい協調となった。

石井 美保 推選
 伸びやかな線が、紙面全体に広がり、明るく爽快です。大線でも腕の動きが軽快で、落筆に弾力を付けた藏鋒で強い線を引いた。技術の高さから、静寂な空気を持つ。

桜井辰雄先生選評



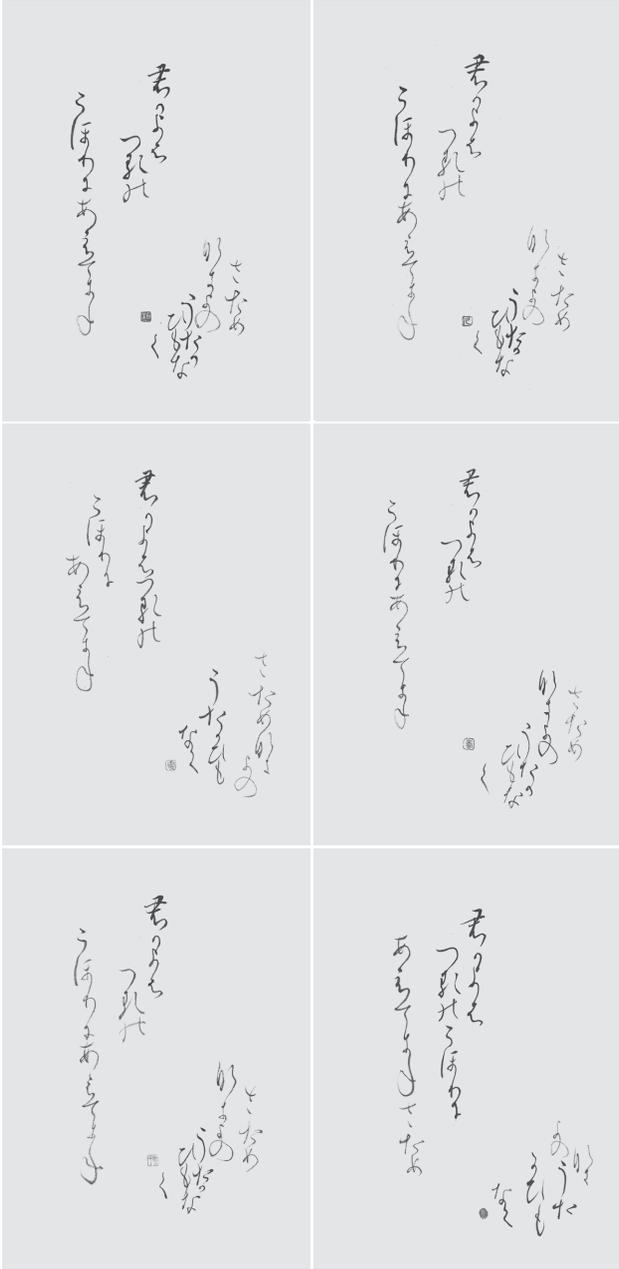
山口幽径 推選
 参考作品の香りを残しながら余白を活かして運筆され、独自のリズムも崩さずに書き上げた安定感のある秀作。終盤での文字内に懐の狭さを感じるのが残念。

滑川江風 推選
 参考作品と法帖とを融合させた良いとこ取りの秀作。潤筆での表現に雄大な運筆を見せ、渴筆を加えた中央部の躍動感が素晴らしい。下部にも大小文字の配置を。

小淵弥生 推選
 潤渴太細の表現が冴え、倪元璐を想わせる筆致と通貫する筆脈とが相まって他を圧倒する。生き生きとした表現のあまりに草書体臨書での可読性の課題も散見。

香川絲翠 推選
 上野本の臨書だろうか。特徴であるゆったりとした息遣いと無理のない自然な運筆の細部までが表現され、字間行間に生まれた余白にも無理がない秀作。

赤富士北祭先生選評



永田由美子 準七
ポイントをよく読み取りながら、潤湯の変化も程よく美しい作品に仕上げた。終句をやや右から書く作品が安定するでしょう。

岩本ゆき子 五段
構成を工夫して逆勝手の形式を自分らしく消化したところが素晴らしい。細かな表現も読み取りながらゆったりとした雰囲気を書き上げた力作。

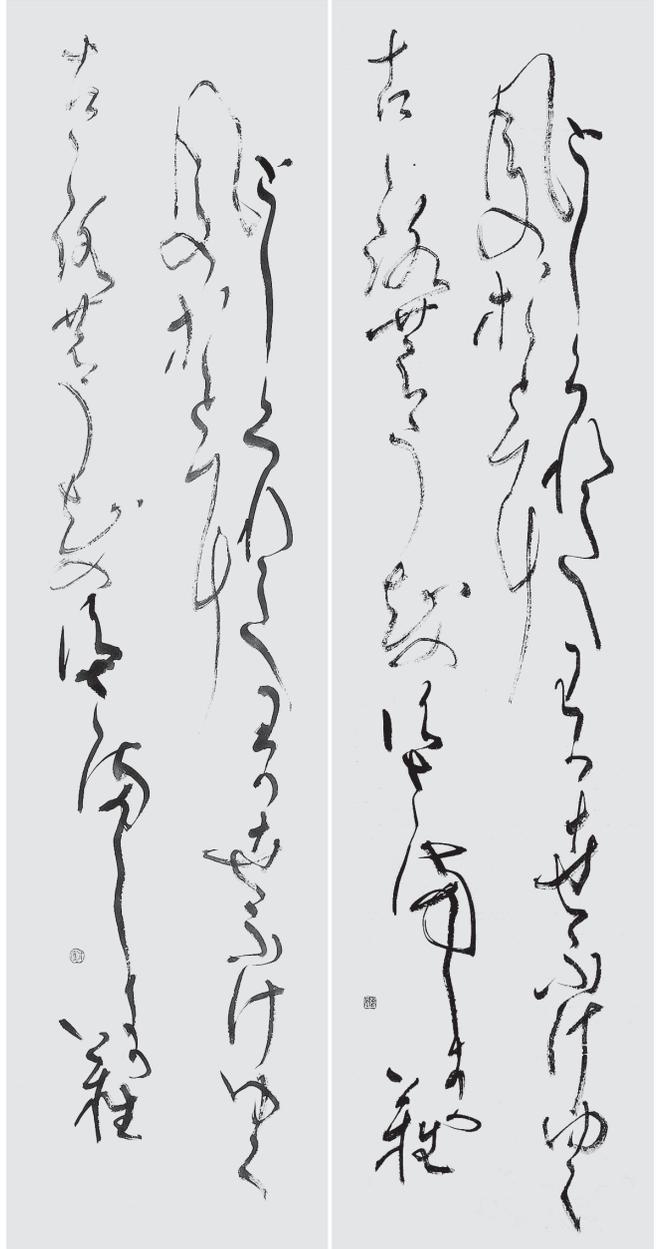
松山 典子 準五
終句の密度ある表現が全体を引き締めた佳作。三行目を書く際は、紙を右にずらし肩の前で書く筆がよく立ち直筆を表現しやすくなります。

栗田久仁子 師範
テンポよく弾んだ筆から生み出される線は暖かみを帯び、範例を活かしながらふつくとした原帖の雰囲気が増された素晴らしい作品。

時岡 寿代 師範
掌の開閉が利き、墨が少なくなりはじめからの筆圧の変化で動きをみせた。中央部の余白も程よく、伊勢集の切れ味を表現した作。

東谷 美子 準師
よくおろした穂先からこぼれ出る線は伊勢集がもつおらかさ、瑞々しさを表現している。筆がよく立ち自在な運筆見事。墨量やや多いか。

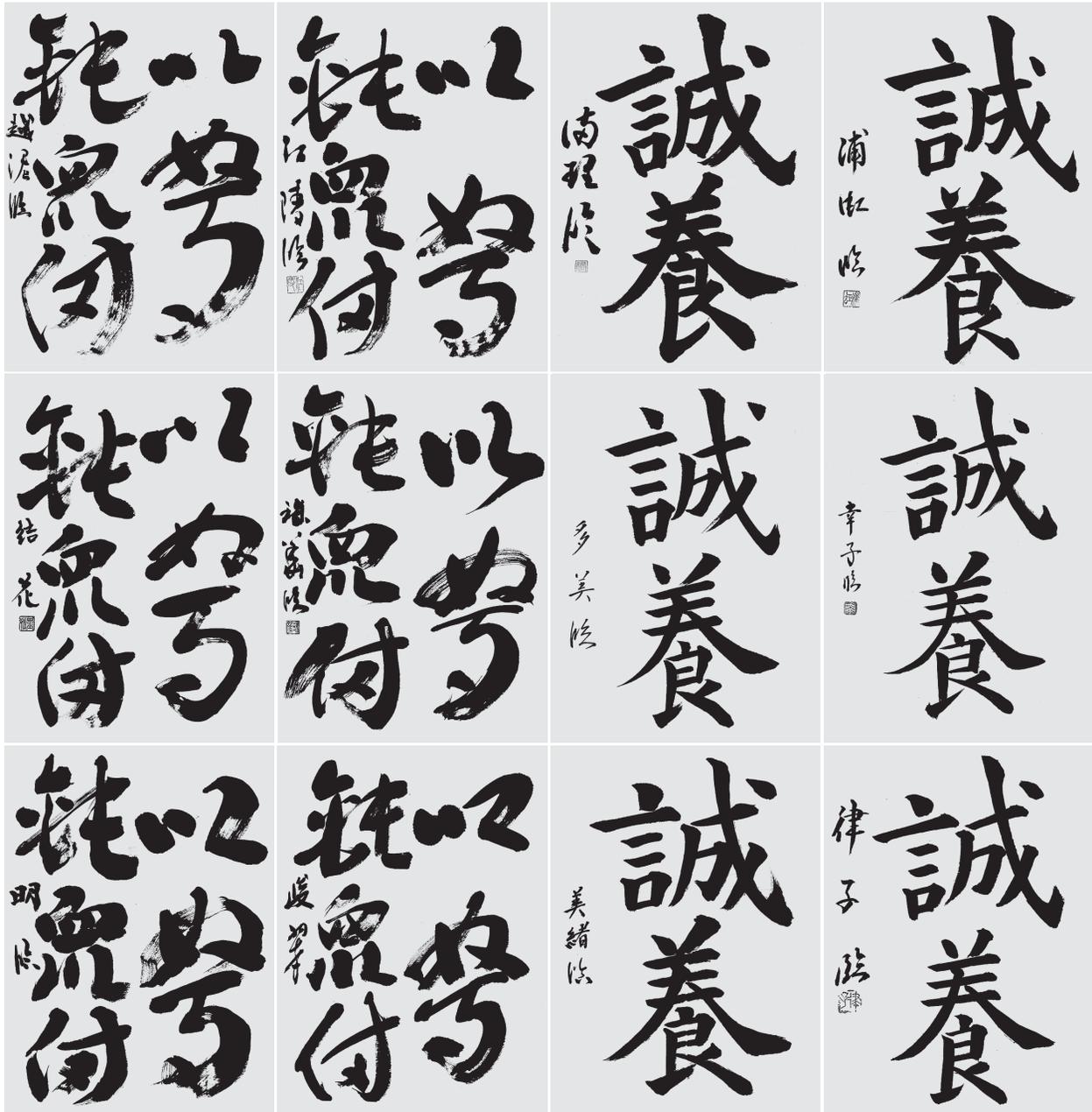
吉澤真理先生選評



村上春風 推選
ご自分の呼吸にあわせた心地良いリズムで表現され潤湯の変化も自然に移りました。墨色に冴えがあり動きのある文字群が躍動しています。

中野 八重子 推選
浮沈や文字の大小を取り込んで、強弱の変化を紙面いっぱい展開。これだけ動きがあり文字数の多い作品の中で、余白が生きています。

高野清玄先生選評



雑賀浦虹 師範
緊張感ある線が心地良い。特に長い斜画は潔さを感じ引き締り紙面を切り裂く勢いの運筆だ。起筆、ハネ等に強く止まる箇所あり、なくしたい。

堀尾満理子 二段
写真版中ではやや太めの作。しかし線に張りがあり健康的な感じがする堂々とこちらを向いていて嬉しい。「良」の白が小さくバランス欠いた。

児玉江陵 師範
鶴亭先生の参考を良く見てそこに羊毛筆の特性を活かし柔らかい運筆で立体感ある作品に仕上げている。丁寧で温もりある線情が魅力的である。

武藤越泥 準七
木簡のリズムを手く自己の手中に収めて軽快に書き上げた。線の細太の変化が全体に行き渡り紙上に奏でられた。「篤」の太線「鈍」の細線が効果的。

山田幸子 七段
やや小ぶりながら細線でキリッと九成宮の雰囲気を出している。筆毛がしっかりと立ち上がり運筆できている。「誠」のハネが少しもたついた。

岡崎多美 二段
鋭く引き締まった用筆が美しい細線を生み出している。凛とした張りつめたムードが作品全体を統一できた。接する横画起筆が見えるのと更に良い。

阿山珠華 準八
木簡の生き生きとした生命力が伝わって来る。所々に見える渴筆が動きを見せ躍動感が見る者を作者の音楽に誘う。見ていて楽しい作品である。

岡田結花 三段
急ぎ過ぎずゆったりとした運筆で落ち着いた安心感を与えてくれる佳作。原本の字形の面白さも理解表現しながら紙面構成も見事で余裕を感じる。

日名子律子 五段
文字内の空間の白が美しい。故に作品全体が明るく大きく見える。爽やかな風が吹き抜ける様な気持ちにしてくれる。左払い起筆が丸くなる。

熊倉美緒 準初
線に深味を感じる墨色が黒々と輝いている。紙との相性もあるが、筆圧の妙や運筆の速度が良いのだろう。伸びやかで明るい趣きが素晴らしい。

松本峻翠 七段
墨量たっぷりの書き出しで作品全体に潤いを感じる。潤筆大線は重厚感を生み出しそれを渴筆が引き立てる。素直な用筆に筆毛が活かされている。

藤本明 初段
写真版一番の太線は横綱級だ。しかし「篤」の渴筆や「鈍」の細線を上手く織り込み重く感じさせず動きと鎮立体感ある作品に仕上げたのは流石。